

「A0 入試入学者に対する研究者養成プログラム」による
学生の海外研修報告について

本学部では、学内で公募が行われた平成 25 年度大学高度化推進経費による教育改革支援プログラム「A0 入試入学者に対する研究者養成プログラム」の採択を受け、平成 25 年 11 月 9 日に「歯学研究コース学生研究発表会」を実施し、本発表会において優秀な成績を収めた学生 3 名を短期海外留学に派遣しました。

(発表会の概要は[平成 25 年 11 月 19 日の掲載情報](#)をご参照下さい)

本プログラムの目的は、これまでの研究成果を英語にてプレゼンテーション及び質疑応答を行い、特に優秀と認められる学生に国際学会での発表や短期海外留学の機会を与えることを目的として実施したもので、1 週間という短い期間ではあったものの、3 名の学生はいずれも研究者としてのモチベーションの向上はもちろん、海外留学を行うことの意義や魅力をそれぞれに見出しており、本プログラムのテーマでもある「グローバル化に対応した人材育成、研究力強化」は目的を十分に達成できたものと考えています。

以下、今回研修を終えた 3 名の学生の研修報告をご紹介します。

今回ダラスとニューヨークの二つの都市に行き、ダラスでは、ORAMETRIX社とベイラー大学、ニューヨークではニューヨーク大学の見学をさせていただきました。

① ORAMETRIX社

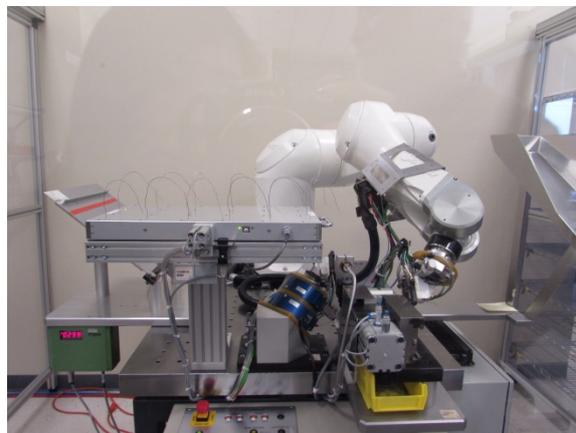
ORAMETRIX社はSure smileという矯正治療のシステムを取り入れている会社です。このシステムは治療前の状態の患者さんの歯型をCTスキャンして、3Dの歯の模型をコンピューター上で表現し、治療計画を立案し、患者さん個人のフルオーダーのワイヤーを作り治療をしていくというシステムです。今回の見学では、模型を使って歯型をスキャンする練習をしているところ、機械がワイヤーを曲げているところ、そしてスキャンした3D模型をパソコン上で操作して治療計画を立てているところを見ながら説明をいただきました。

このシステムを使うことで、今まで見えなかった部分が見えてきたり、術者の経験や勘に頼っていた部分がより明確になり、従来に比べて治療期間の短縮が期待できるようです。

また、一度治療の道筋を決めてしまっても、このシステムだとその都度状況に応じて最終ゴールの変更が可能になるということでした。実際に機械がワイヤーを曲げているところを見れてとても感心したし、最先端を感じる事ができたのですが、歯科医師がきちんとした治療計画をたてる事が大事とおっしゃっていたのがとても印象に残りました。



ORAMETRIX社にて



ワイヤーを曲げる機械

② ベイラー大学

ベイラー大学は、渡辺先生が以前勤務していたということで、学生の授業風景や実習風景だけでなく、診療をしているところや研究室の中など様々なところを見学することができました。アメリカの歯科大学は4年で、1,2年の時に基礎実習を行い、3,4年で実際に患者さんを診療していくみたいでした。基礎実習では、窩洞形成や総義歯の実習を行っていました。自分たちがやっていることとそんなに変わりはないのですが、3,4年生の診療では、ユニットの数はかなり多くて、1度にたくさんの学生が診療を行っていました。学生の診療は治療費が安くなるので、学生に見てもらえる患者さんが多いとのことでした。アメリカと日本では保険制度が違うので、治療費をやすくすることはできないかもしれないけれど、学生のうちからたくさんの患者さんを診ることができる

のはとてもいい経験だし、すごく羨ましいと思いました。他にも保存や補綴や小児などさまざまな科を覗かせてもらったのですが、顎顔面補綴は日本でも見たことがなく、初めてだったのでとても興味深かったです。



保存修復の臨床基礎実習風景



Baylor College of Dentistry

③ ニューヨーク大学

ニューヨーク大学は、渡邊先生の友達の補綴科の先生に案内をしてもらいました。診療室の規模や内容もベイラー大学とあまり変わらなかったと思います。ニューヨーク大学で印象に残っているのは、日本人の先生が何人が留学をしていたということです。研究だけでなく、臨床で実際に患者さんを相手にして治療を行っているということで、本当にすごいと思いました。また、見学をした夜に、留学をしている日本人の先生と食事をする機会がありました。その先生はアメリカに16年前から留学しているということで、アメリカと日本の歯科の違いだったり、研究のことだったり、生活のことだったり、様々な話をしていただき、とても有意義な時間でした。



ニューヨーク大学の歯内療法診療風景



NYUの先生方と一緒に

最後に、今回、アメリカに1週間の研修に行って、アメリカの大学を見学したり、最先端の治療を見学したりできてとても貴重な時間を過ごせたと思います。日本の大学と同じところや違いところなど、話を聞くだけではわからなかったのが、実際に見学をしてイメージをつかむことができたし、視野が広がったと思います。日本とは違う良さがあり、留学をしてみたいという気持ちがとても強くなりました。これからはその気持ちを忘れずにしっかりと勉強を頑張っていこうと思います。そして、このような機会を与えてくださった先生方に感謝したいです。

海外研修を終えて

5年 崎原通乃

私は1月18日から6泊8日でアメリカのダラスとニューヨークへ海外研修に行ってきました。ダラスではベイラー大学と sure smile という矯正器具の会社、ニューヨークではニューヨーク大学を見学しました。どちらの大学も学生が患者さんを診療しているらしく、学生専用の診療フロアがありました。ドクターが診療するよりも治療費は安く、学生のうちに何人もの患者さんを診るため、卒業する頃にはほぼ一人前のドクターになっているそうです。日本では学生の間は何十人と診療することはないため、アメリカのこの制度を少し羨ましく思いました。

この海外研修で最も強く感じたことは、英語を話せるようになりたいということと、留学してみたいということです。アメリカは本当に多くの人種が集まっている国で、多様な文化に触れることができます。わずか1週間ではありますが、様々な人と交流し話を聞くことで、視野が広がり、少しだけ価値観が変わった気がします。



ケネディー暗殺現場（ダラス）にて

○研修に参加しての成果

私は2014年2月17日から20日にかけて、アメリカのニューヨークにあるコロンビア大学、ボストンにあるハーバード大学、ボストン大学、タフツ大学の見学をしてきた。基礎系から臨床系の研究室、大学病院の見学、学生実習の見学といった、幅広い分野の見学をすることができた。

コロンビア大学歯周病科の辻翔太先生との会談では、主に海外留学における話や、コロンビア大学のPost graduateについての話をした。海外留学をすることで、考え方の変化、言語力、プレゼン力、批判的な論理的思考、世界の動き、最新の知識とその解釈の仕方、などを得ることができる。海外で学んだことをどうやって日本で活かしていくかといった話を聞くことができた。アメリカと日本の臨床データの違いや、学生のモチベーションの違いといった話も聞くことができ、とても勉強になり、私自身、考え方に幅を広げることが出来た。

ボストン大学補綴科の山本英夫先生、タフツ大学歯周病科の山本里美先生との会食では、お二人のアメリカでの診療の話、アメリカの歯科は専門性が高いこと、保険制度の話、アメリカと日本の学生が診る患者数の違いなどの話を聞いた。ボストン大学、タフツ大学における補綴科、歯周病科、口腔外科といったそれぞれの話を聞くことができ、アメリカの歯科の診療についての実情を知ることが出来た。ボストン大学の病院を案内してもらい、補綴、歯周病、矯正、麻酔といった、さまざまな診療科を見学することができた。私と同じ歯学部の実習風景を見ることもでき、マネキンを使用して真剣に実習に取り組む学生を見て、とても良い刺激を受けることができた。

ボストン大学バイオメディカルセンターの持田欣幸先生は、ご自身の研究室をお持ちで、現在は遺伝病の研究をされている。象牙質形成不全症、エナメル質形成不全症、外胚葉異形成症など、その遺伝病の遺伝子の欠損が、本当に遺伝病の原因なのかをつきとめるために、K0マウスを作製して、検討する実験である。アメリカの研究室の研究費の話や実験や論文といった成果に対する、大事さ、厳しさを聞くことができた。

タフツ大学補綴科の木戸淳太先生は、長崎大学歯学部出身の先生で、一番色々質問することが出来た。木戸先生の診療風景を最初から見学することが出来た。日本の診療との違いは、やはりアメリカは保険（民間保険会社の保険）が大事なことで、初診時に支払い可能な金額をあらかじめ聞き取りをしていること、考えられる全ての診療計画のメリット、デメリット、費用、治療期間、予後などを細かく話し、そのうえで患者にベストな選択をさせること、であると感じた。長崎からアメリカに来て活躍されている先生の、裏での努力、アメリカでの大変さといった話を聞いて、何をするにしても半端な気持ちではなく、真剣に努力する必要があることを教わった。

ハーバード大学の永野健一先生は、Baron研究室にて研究をされている。有名な研究室で、広い実験室、沢山の実験器具、設備の多さに驚いた。私自身も歯科理工学と口腔腫瘍治療学で研究をさせていただいたことがあるが、やはり学生が行う一研究とはレベルが違っていると感じた。アメリカでも臨床に行かず研究者になる人は少ないようだが、自分のやりたい研究を行うこと、まだ解明されていないことを探求する面白さを語って頂い

た。私はこれまで研究にはあまり興味はなかったが、今回の研究室の見学で興味を持つことが出来た。

ハーバード大学に留学されていた丸尾勝一郎先生は、現在神奈川歯科大学の歯科補綴学に所属されている。1年間の留学期間は短いと感じたことや、丸尾先生のような若手の歯科医師の方々が活躍し、これから歯科を変えていこうとされている意気込みを感じた。これまで若い世代の歯科医師の方の話聞く機会があまりなかったのも、今回このようにじっくりと話を聞く機会を得ることが出来たことはとても貴重な経験であった。

また、ボストン大学病院の post graduate students の方々と昼食を一緒にすることが出来た。私は英語を話すことが全くと言っていいほど出来ず、最初は彼らの話すことを理解することで精いっぱいだった。しかしせっかくアメリカに来ており、このような経験はめったにできることではないと感じ、英語で彼らとコミュニケーションをとりたかった。私の英語は全然出来ていなかったと思うが、こちらが言いたいことをくみ取ってくれようとする彼らのおかげで何とか会話することができた。国籍は違っても、お互いにコミュニケーションをとれることは改めて素晴らしいことだと感じた。

私は今回のアメリカ研修で、このような沢山のことを学ぶことができ、一番実感したことは、これまでの自分の見てきたことやものは、すごく狭い範囲のことだったと感じたことである。アメリカでお会いした先生方、それぞれさまざまな話を聞いたが、どの先生も共通しておっしゃることは、自分がやりたいことを明確に持ち、やりたいことをやる、ということであった。これまで海外留学にはあまり興味はなく、自分には関係のないことだと思っていたが、実際にアメリカに行って、大学を見学したり、先生方の話を聞いて、これから自分のやりたいことをやるために留学してみたいという気持ちも出てきた。たった1週間の研修であったが、今までの大学生活からは決して得ることが出来ない経験をさせてもらったと思う。来年度以降、学生が海外研修に参加できるような機会があるならば、ぜひ行って欲しいと思う。歯学研究コースでの研究もそうだが、学生のうちに研究を行ったり、海外に行く機会があることは大変貴重な経験であると身をもって感じる事が出来た。



ボストン大学



持田先生と



post graduate students との昼食



抜歯器具



ボストン大学補綴科の山本英夫先生と



学生実習の風景



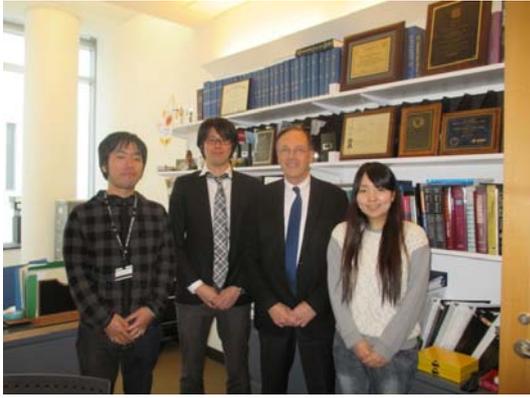
タフツ大学にて 木戸先生と



ハーバード大学



バロン研究室の風景



バロン先生、永野先生と



丸尾先生と会食